
召し使いの召し使いはお嬢様

やるせない人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召し使いの召し使いはお嬢様

【Nコード】

N1616Q

【作者名】

やるせない人

【あらすじ】

親のいない高校生の啓志は国の召し使い義務化という政策により召し使いとしての平和な日々を送っていた。しかし雇い主の娘、冥理がアメリカから帰国。それがきっかけで平和な日々が騒々しい日々へと変わってしまう……。さらには冥理の父である功治から冥理の護衛を頼まれ、それがまた新たな騒動を巻き起こす！

召し使い日記―1日目―

――召し使い義務化――それは日本政府が二年前に出した政策。不景気続きで起こったたくさんの方の失業者で、無職の人間が増え続けていた頃、見かねて政府が出したとてもなく型破りな政策である。内容は名前の通りで、一家に一人の召し使いをつけるというもの。つまり職のない人たちに新しい仕事を作ったのだ。大雑把に言うのだが。最初はあらゆるところから反対の声や、このような政策を取った政府を批判する声も多くあったが、二年たった今では意外とすんなり受け入れられている。まあ実際この政策のおかげで日本経済は安定を取り戻したし、一時期大きな問題だったホームレスの増加などもなくなった。この政策に救われた人は決して少なくないだろう。俺も実際この政策に救われていたからだ。

俺は『霧浜啓志』（霧はま けいし）高校一年生で一人暮らしをしている。家は高校生にはもったいないそこそこの一軒家だ。親が死んだとかそんなのではない。俺が高校に進学するときに、「旅に出る。探すなよ。Byパパ・お母さん」という書置きを残し行方を暗ませている。かねてからいずれはそうなるかと両親には聞かされていたので、別にどうこうという事もなく一年間一人暮らしを続けている。

高校生が一人暮らしというのはとても難しいことである。それはもちろん金銭的な意味でだ。しかしこの政策があったから助かった。アルバイトを見つけるのは大変で、しかも収入が少ないと思っていた俺は、召し使いの求人所に行ってとても驚いた。その値段はなんと通常のサラリーマンの収入をはるかに上回っていたのだ。しかしすべてがすべてそうというわけではない。俺が引かなかった雇い主さんがお金持ちだったのだ。本当に運が良かったと思う。

しかし召し使いというものはとても大変だ。さっきは高校一年と言ったが、はっきり言ってほとんど登校していない。給料がいい分一日中働かなければならない。まあ、しかしこれには他にも理由が

あるのだけれど……。

（とか回想してないで起きないとな……。もう五時だ）

俺は布団から体を起こして、電気をつける。時計を見ると五時一分前だった。

（……ほらな）

ちなみに手元の時計にはアラーム機能がないので、五時と判断したのは体内時計だ。召し使いたるもの、この程度は当たり前である。……と思う。正直俺はまともに育ってないので、当たり前とか言える口ではない。

「準備していくかあ……ふわあ」

いくら春でも冷える。寒いと眠気が出てしまっていけない。

「……………顔洗って、トレーニングして行こ」

結局家を出るのは六時近くになる。いつもこうだから早起するのは仕方ない。仕事道具を入れたバックを抱え、玄関へ急ぐ。服装はパーカーとジャンパーという至って普通の服装だ。勘違いしてる人がいるかも知れないが、さすがにメイド服や執事服を常に着てはないからな。

通勤は歩きである。実はお屋敷は自分の家から歩いて二十分ほどのところにあるので、特に交通機関を使う必要がないのだ。

歩きながら右手の腕時計を見る。……この時計も古くなってきた。就職のとき買ったのに、もうぼろぼろだ。早く新しいの買わないと、急に壊れちゃったらまずいよな！。

「五時五十二分。いつもどおり余裕だな」

この日まで……。そうこの日までは何もなかったんだ。

この屋敷の召し使いの集合時間（日中担当⇒俺）は6時40分である。しかし俺は最低でも6時10分には着くようにしている。それには色々な理由があるのだが、俺がここの使用人の中で最も若いというのが主である。別にそう言われている訳ではないので自主的にである。

お屋敷の前に着く。時計の針は8分を指している。いつも通りと言ったところであろうか。

お屋敷の大きな門の前に来るが、通り過ぎてしまう。当たり前だが召し使いの入り口はここではなく、厨房側にある業務用の入り口だ。業務用の入り口はこの反対側にあるから、お屋敷の周りを一周してはならない。このお屋敷は大きいので一周すると1km近くある。ちなみに俺はこれから走る。わざと正門側に行って、業務用の入り口まで全力で走るのが俺の日課だ。

「よつと」

荷物を腰に縛って固定し、靴紐を結びなおす。そして軽く息を整えてゆっくりと走り出す。うん、いつもどおり。気持ちのいい風が顔の横を通り過ぎる。そうこれが俺の一日の始まり。

（よし今日もがんばるか！）

「おはようございまーす」

厨房の様子を確認する。

「ああ、おはよう」

薄暗い厨房の奥から老人の声。厨房の電気がついて、休憩室のあたりから老人が出てくる。

「もしかして仮眠中でしたか。すいません」

その老人、佐伯さんさくべさんが手を横に振って答える。どうやら気にするなどと言っているようだ。佐伯さんは椅子の下に置いていた荷物を肩にかけて出て行く。彼は夜勤の人だ。だからあまり話したことはないが、そんなに悪い人ではないと思う。

縛っていた荷物を外し使用人部屋に向かう。普通使用人にへやはない。こんなお屋敷だからあり得るのだ。特に俺の場合はとあるわけがあり少しばかり大きなお部屋だ。

部屋で着替えを済まし、リビングへ向かう。まずは掃除だ。夜勤の人があらかたやっておいてくれるのだが、改めてやる必要がある。軽く箒ではわいたあと、全体に雑巾をかける。ちなみに旦那様がま

だ就寝中なので掃除機は使えない。

「よし……こんなもんな」

雑巾をかけ終え、庭に向かう。次は洗濯物を干さなくてはならない。庭の近くに設置されている洗濯機から洗濯物を取り出す。さすがの量であるが、なれた事だから今さらなんとも思わない。

洗濯籠を持って庭に出ると、庭のここから少し離れたところに人影があった。主人が起きたのかと思ったがどうも違うようだ。この時間帯は旦那様と自分以外は誰もいないはずだから不法侵入者かと思ひ身構えたが、その養子は幼く子供のようだった。それも少女のようだ。

「あ、あの君」

今まで気付いていなかったのか、少し驚いたようにこちらを振り返った。

「なっ！子供！」

「こ、子供？」

明らかにそちらのほうの子供じゃないか。誰なんだこの失礼なのは？というかどこから入ったんだ？……いや、この関係者の子かもしれないな。とりあえず落ち着こう。

「君は誰かな？お父さんかお母さんは？」

ぶちっ！！

ん？今何かが切れた音が？

「……………いするな」

「え？どうしたの？」

「子ども扱いするなっ！！」

近づいてきたかと思うと、おもいきりみぞおちに蹴りを一発。突然のことで避ける事さえ出来ず、モロに食らってしまった。

「うう……な、何なんだ……？」

呻きながら顔を上げるが、先ほどの少女はどうやらもう行ってしまったようだ。仕事はまだ残っていたので腹を押さえ、痛みをこらえながら何とか洗濯物を干し終えた。さっきの女の子も気にはなる

が、召し使いとしての仕事を疎かにすることは出来ない。まずは朝食の用意。旦那様が起きてきたらさっきの事を少し聞いてみるとうよう。

朝食の用意をしようと厨房に行き冷蔵庫を開ける。

「うわっ！何じゃこりゃ」

冷蔵庫はぐちゃぐちゃに荒らされていた。物の配置が変わってるどころか、いくつか食べ物がない。先日、パーティーをしたときなどはよくこうなるが、そういう場合は何かしらの報告がある。せめて佐伯さんが何か言い残して帰るだろう。つまりこれは部外者、この家のルールを知らない者の行い。しかもおそらくそんなに時間は経ってない。昨日の夜の犯行だったら誰かが気付くし、佐伯さんも交代のときに最終確認くらいするからだ。

（俺が来てからの犯行？けどいったい誰が？）

そのとき脳裏に先ほどの少女が浮かぶ。おそらく彼女が犯人だろう。けれど、そうなるのもっと訳が分からない。俺が来てから屋敷に人の出入りは無い。そうなるそれ以前、昨日の夜からこの屋敷にいるということになる。それは不可能に近い。

出来上がった料理をさらに盛り、時計を見る。

「6時48分……………」

正直旦那様を起こすには早い。しかし聞きたいこともあるし……………そうだな、起こしに行こう。

旦那様の部屋に急ぐ。部屋の近くまで来ると、部屋の中から話し声が聞こえてくる。もう起きているのだろうか。……………いや無い。あの人に限って誰かが起こしに来るまでに起きるなんてことは無い。そうなるといったい誰の声なんだろう。

誰かいるかもしれないので部屋のドアをノックする。

「おはようございます、功治様。起床のお時間です」

「あっ、けいくん？入ってきて、入ってきて」

（起きてたのか。ならさっきの話し声は旦那様のものかな？けど、そんな独り言のひどい人だったかな。さっきの女の子だって……………

…)

そんなことを考えながら、旦那様の部屋のドアを静かに開けて中に入る。旦那様はベッドに座っていて、その隣に女の子が一人。あつ、やっぱり旦那様は今起きたばかりだな。ごく普通のいつもの光景………。じゃないだろ!!この子さっきの子だよな?何でここにいるの?ていうか、めっちゃ睨んでくるんだが………なぜ??
「はっはっは。驚いたろう、けい君。こんな美人さんが急にいて」

その言葉に俺は正気を取り戻す。

「功治様!いったいなんですか!?!きちんと説明してください」

「わー!!そんなに怒らなくても」

ひとまず落ち着こう。そしてやさしく問いただしたら………。

「娘さん?」

「その通り。私は紀丑功治が娘『紀丑冥理』だ」

俺の問いには紹介された娘さん、冥理様が答えた。

「あれ?功治様」

「ん?」

「確かにお嬢様がいるのは知っておりましたが、確か自分より一つ下、16歳ですか?がアメリカに一人居おられるだけではありませんでしたか?」

そう、旦那様に娘がいるのは知っていた。しかし、前聞かされたときは自分の一つ下だと聞いていた。これは間違いない。中学生くらいの子がいるというのは初耳だ。

「ちょっと?けい君。それはどういう意味だい?」

「え?だから私は中学生の娘さんもいらっしやるとは聞いていなかったと………」

「死ね~~~~~!!!」

言葉を途中から怒声と、とび膝蹴りによって遮られる。なかなか切れのある一撃。しかも不意打ちだったため、また思い切り食らってしまった。冥理様は怒りの形相で部屋から出て行く。なんで?

「あーあ。だめだよいい君。それはいけない」

「は、どういうことですか」

「冥理ちゃん、今年で16歳★」

「俺の一つ下……………なんてこった!」

「どうぞ。功治様」

席に着いた功治様に朝食を差し出す。功治様はそれを「ありがとう」と言っにっこり微笑む。少し前から「わけがあつて……………」と言っているが。その『わけ』とはこれ。功治様は俺を好いている。この好いているとは、恋愛のことではなく、どちらかと言うと家族愛に近い。なぜ俺のようなガキをわざわざ雇ったか。それは息子が一人欲しいという功治様の要望だった。お嬢様、冥理様もアメリカに行っていたのでさびしかったのだろう。なので功治様は俺にはとことん優しいのだ。

「あの……………冥理様はよろしいのでしょうか?」

「うーむ……………」

低く唸って、息を大きく吸い込む。大きく口を開け叫ぶ。

「めー……りー……!」

上で誰かが転ぶ音がする。おそらく急の大声に驚いた冥理がこけたのだろう。階段を急いで降りる音が聞こえ、足音が近づいてくる。慌てた様子の冥理が勢いよくドアを開けダイニングに飛び込んできた。

「けい君が心配するだろう。食事はきちんと取りなさい」

「ううう……………」

しぶしぶ席に着く。元々一人分しか作っていなかったので、冥理の分は話の後に急ぎで作ったものだった。なので、功治の分と少し差がある。功治が高級ホテルの朝食のようなものなのに、冥理の分はえらく家庭的だ。これは俺の素の料理である。

案の定二つを見比べて、冥理から不満があがった。

「なに?これ。お父様のとえらい違いね」

「すみません。朝はお一人分しか作っておらず、急だったもので」「ふざけないで！こんな庶民的なもの食べれるわけ無いでしょ」

庶民的って言っちゃあそうだけどさ………そんなに言わなくても。ここまで言われるとは思ってなかったけど……仕方ない。作り直そう。

冥理の前から料理を片付けようとしたが、功治がそれを止めた。

「待った待った。俺が食べたいな、それ」

「えっ!？」

「いいよね？けい君」

突然だったから驚いた、という訳でもない。実はたびたび功治様は俺と同じ食事を食べたい、と言うことがある。何でも家庭の味が懐かしいらしい。けれど毎回俺が口に合わないと言って、断っているのでここぞとばかりに頼んできているのだろう。

「しょうがないですね。今回だけですよ」

まあこの場合仕方ないからあげておこう。残されるともったいないし。

「ヤッター！じゃあ冥理ちゃんこれと交換ね」

「えっ！本気ですかお父様!？」

これに冥理は心底驚いたようだ。テーブルを両手で叩き、声を荒げてこちらを睨んでくる。お父様に何をしたと目で訴えてくる。功治はそんなことも気にせずに、もう食事にありついている。一口食べる度に美味しい美味しいと褒めるので少し恥ずかしい。

「えっと、お食事はどうなされますか？冥理様」

「お父様の分を食べるわ。もういいから下がって!」

「し………失礼しました」

冥理にそう言われ仕方なく引き下がる。本当は後ろに控えてないといけないのだが、冥理の威圧的な言葉に押されて、つつい部屋を出てしまった。

中からは親子の話し声が聞こえてくる。きっと仲が良いのだろう。喋ってる内容は聞こえないが、聞こえてくる二人の声はとても楽し

そうだ。いいなあ…………。

「ご馳走様。片付けといてね」

「はい。お嬢様」

食べ終わった冥理はこちらに目もくれずに、階段を上がっていく。そういえばさつきからずっと二階にいるようだが、部屋が二階にあるのだろうか？二階の部屋はほとんど物置だったから、片付けないとそのままでは汚いのではないだろうか。

「功治様」

「ん？」

「お嬢様の部屋は二階ですか？もしそうであつたらお片付けをと…

…」

「……………ああー。そうだね。お願いしようかな」

（今の間はいいなんですか？）

不信心を持つがそう聞くわけにもいかない。

「分かりました。では」

「あーちよっとちよっと」

早速お嬢様の部屋に行こうとしたところを呼び止められる。

「うん。あのー冥理とさ。仲良くしてやってね」

頭に冥理の顔が浮かぶ。彼女は俺を思い切り睨んでいる。

ごめんなさい功治様。それがどうなるか自分には保障できません。

「お嬢様。いらっしゃいますか？」

「何？」

部屋の中から短い返事。よかった部屋にいた。

「お部屋の片づけがされてないと思い、掃除に来ました。入ってもよろしいでしょうか？」

「馬鹿。駄目に決まってるでしょ」

「やっぱり？」

「しかし功治様もそうする様にと言われましたが？」

「お父様が？……………入れば」

「では失礼します」

部屋に入ると案の定、部屋には荷物がたくさん積まれていた。やはりここも物置として使っていた部屋の一つだろう。だいぶ埃も被っている。

「ううむ。やっぱり汚いな」

早速片付けようと荷物を降ろしにかかる。だが無駄に縦に積み重ねているせいで、とても不安定で危ない。今にも崩れてきそうだな。こはゆっくりと、地道に降ろしていくほかなさそうだな。部屋にはお嬢様もいるし、万が一の事があってはたまらない。

近くに放置されていた椅子を踏み台にして、上にあるものから順に降ろしていく。

「……………」

うっ何なんだこの痛い視線は。お嬢様か？俺は部屋を片付けてるだけです。そんな背中越しでも分かるような視線をぶつけないでください。

三つほど降ろしたところで視線が気になりすぎて、つい後ろを向いてしまった。

「……………キッ！」

うわあゝ。ものすごく睨んでるよゝ！本当に何なんだよう。

そんなことを思いつつも、喋らずに黙々と仕事は続けている。さすが俺。使用人のかみだぜ……って訳じゃなくて、ただ話しかけづらいだけなんだよな。

いろんなことを考えながらだったが、結構仕事は進みもう半分降ろした。お嬢様をあんまり待たせても悪いしさっさと終わらせないと。

「ちよつとあんた」

ガタガタ！！！！

「うわっ何してんの！」

油断しきっていたので、急に声をかけられ驚いて椅子から落ちた。まずい、きつと遅いからお怒りなのだ。

「はいっはいっ。す、すぐに終わらせます」

急いで椅子を立てて……………。

「いや、別に急かす訳じゃないから」
こけた。

「あんたって結構抜けてるよね」

「……いててて。な、何でしょう？」

冥理は一度俺を見て溜息をつき、後ろの椅子に座った。

「あんた何したの？」

「……………はい？」

急な質問。なんというか突拍子が無い。

何の事だか分からず固まった俺に冥理はもう一度溜息をつく。

「お父様のことよ。どうしてあんな風になっちゃたの？」

「あんな風とは？」

「はあ？明らかに人が違うじゃない。昔はもっと厳しい人だったのに」

厳しい人？それは功治様がか？俺が来て一年経つがずっとあれだぞ。

何かの間違いだと思う。だがさっきから黙っているのは、それを面と向かってお嬢様に伝えるかどうか悩んでいるからだ。別に何かやましいことがあったわけではない。

「なに？黙っちゃって。やっぱり何かあるんでしょ？」

だがお嬢様は最初から俺を疑っているので俺の沈黙を言いにくいことがある、と受け取ってしまったようだ。椅子を立ち上がり俺にじりじりと詰め寄ってくる。

「さあ、何をしたの？言いなさいよ。さあさあ」

「うわあああ！危ないいい！ち、近寄らないでええ！！」

さてこんなところだが説明しておこう。実は俺は女の人がつつつても苦手だ。苦手というか耐性が無いのである。それは俺の育ってきた環境などが関わってくるのだが、その話は今は置いておこう。とにかく近寄られるのはやばい。自然と後ろにさがってしまう。

「なに逃げてんのよ！私は主人よ！」

「それは今関係ありません！って！ささ触らないで！」

とそこで背中が壁に当たる。追い詰められてしまった。これはまずい。

ゆらりと一滴の汗が頬を伝う。

「話せ！」

追い詰められた俺の腕を冥理がつかんだその瞬間、俺はついその手を慌てて払ってしまった。これには他意はなかった。ただとっさにだ。しかしまさかそこまでされると思ってた相手が、自分の行動に腹を立てないわけが無いのである。

「なっ——」

「あっ……いえっこれはっ！」

冥理は一瞬とても寂しそうな顔をした。その顔はあの頃の俺によく似ていた。しかしそれは一瞬ですぐに憤怒の形相へと変化する。

「あんた何様のつもりよー！！」

「どうわああー！？」

はい。やっぱりそうなりますよね。今日二回目のとび膝蹴りをあげがとう。

この日は啓志にとって初めて女の子に触られた日で、同時に初めて飛び膝蹴りを食らった日となった。

啓志はこの日のことを人生最大の悪夢としてずっと忘れないと誓った。だがこの誓いはいとも簡単に破られる。それは明日こそが本当の悪夢だからだ。

召し使い日記―二日目―

足取りが重い。それにはもちろん大きな理由がある。

一つはただ単に疲れているということ。今思い返しても本当に酷い一日だった。

もう一つはもちろん冥理様のことだ。あの人は俺をとてつもなく嫌っている。はっきり言って、近くにいるだけですごく疲れる。あれは早めにどうにかしたいものである。

（まあ、いつもどおり仕事してれば何も無いさ。ようは慣れだな」そう自分言い聞かせながら、いつもどおり仕事場に入った。いつもどおりのはずだった。

「ナ、ナニこれ？」

残念なことにそこにいつもどおりは無かった。

荷物を下に落とし、慌ててしゃがみこむ。人差し指を立ててそれで床に触れる。そして立ち上がり次は近くの戸棚である。人差し指を確認する。

（こ……これは！？……まさかっ！！）

庭の洗濯物干し付近に急ぐ。さっきの事だけだったら説明が付くがこれまでは……。

「な、なんてこった……」

そして最後厨房に戻り、音を立てる鍋のふたをゆっくりと開ける……。

「ぎやあああああ！！？」

なんと屋敷には俺の朝の仕事が何一つとして残っていなかった。

仕事？―朝の掃除 何者かによって完遂。

仕事？―洗濯物干し また何者かによって完遂。

仕事？―朝食準備 またまた何者かによって完遂。

残る仕事ゼロ。つまり用無し。することの無い召し使いほど使えないものは無い。

その場につくりと膝をつく。

彼がなぜこんなに落ち込んでいるのかというと、啓志がこれを功治がやったものだと思っているからである。

雇い主が召し使いのやるべきことをわざわざするときというのは、「君は使えないからもういいよ」と遠まわしの意思表示なのだ。

「クビ……クビかぁ……」

つまり啓志は解雇されたと思い落ち込んでいるのだ。

「ふっ。くよくよしても仕方ねえな。潔く別れの挨拶と洒落込もうか……ハハハハ!!」

クビになったら路頭に迷うことになるので、本当に気が動転してしまっている。膝がガクガクと震え、立つことすら出来ない。仕舞いには床を転げまわる始末だ。

「ちよっとおまえ。何してるんだ!？」

音を立てたのが聞こえたのか、パジャマのまま冥理が降りてきた。その声は怒気を帯びて、明らかに不機嫌そうである。

この声は冥理様……。すぐく会いたくなかったのに、今となればむしろ会えて嬉しい。きつと解雇も彼女が嫌がったからだだろうな。うふっふふふ。冥理様？嫌われたからですよね。ふふふ。良いんですよ。本当に。はっははははははは。さようなら」

「なっ何こいつ!？き、気持ち悪すぎる」

何をいまさら、そんなこと言っちゃって。何をそんなに驚く必要があるんですかね。あっ……けなしてるのか。こんな自分を笑ってるんだ。

「本当、どうしたんだろこいつ。な、何かすごい気の毒。何か分からないけど……」

らららら〜♪

仕舞いにはぐったりと倒れて動かなくなった。

「……ね、ねえ。どうしたの?」

あまりのおかしさに冥理も心配になり、声をかけてしまった。

「きつと勘違いしているですよ」

「勘違い？何を？」

「自分が解雇されたと思っているのでしょうか」

「あつなるほど……って、誰？」

すぐくナチュラルに冥理の隣に女性が立っている。黒い髪のショートヘアで頭にカチューシャ、黒いドレスに大きなエプロン……まあ、メイド服である。

「お前メイド？この家の」

「左様でございます。今朝からですが」

その言葉に啓志が反応する。むくりと起き上がり、一瞬で間を詰め寄って顔を凝視する。そしてなんともいえない妙な顔をする。

「ふーん。あなたが俺の代わりですか。ほう」

「な、何ですか」

たじろぐメイドさん。そりゃあ初対面の人間に顔の真ん前に来られたら、対応に困るだろう。だが今の啓志は暴走状態なので、そんな事は全くお構い無しである。（女性が苦手というステータスも今は無効となっている）

「ちよいとツラかせやうねーちゃんゝあゝん」

いつの時代の不良か。

「近い。落ち着け」

視界が真っ暗になる。冥理の右ストレートが顔のど真ん中に決まっていた。

だんだんと視界が明るくなってくる。どうやら自分は寝ていたようだ。………給仕室で？

「あー目えさめましたよう。ちよっと啓ちゃん大丈夫？」

ん？何だ。女の子？誰なんだろう。朝の記憶が若干曖昧でよく分からん。何かとんでもないことがあった気がするのだけれど………

「けーいちゃん」

「うおっ」

何でこの子俺の名前を知ってるんだ？俺の名前を知る女の子は5人もいない筈なのに。というか俺自身がこの子と全く面識が無いのだけれど。

「あれあれ。僕が名前呼んで不思議そうな顔しないでよ」

「え？いやだって……………」

「起きたの？」

そう言って給仕室に顔を出したのは冥理様だ。普段着を着ているので、もう起きてからかなり時間が経っている様だ。

「あの冥理様？自分はいったい……………」

「それについては大体の状況は理解したけど、詳しいことはお父様に聞かないと分からない。だから起こしてきてよ、お父様」

「自分がですか？」

「あんたじゃないと起きないでしょ」

そういえば佐伯さんもそんなことを言っていた気がする。あれは冗談じゃなくて本当の話だったんだ……。

それなら仕方ないと思い立ち上がろうとしたが、何か引っかかる（あれ？俺、なんか起こしちゃいけない気がする。ていうかここに居ちゃいけない気がする……………？）

「ほら、早く行くわよ」

冥理様に急かされて、若干の突っ掛かりがあるまま功治様の部屋に向かった。

「功治様入ります」

返事は待たずに中に入る。モーニングコールで起きないのが功治様だ。返事が返って来るはずも無い。

「あれ？お父様は？」

功治様の姿がベッドの上にない。それに対して後ろの二人は驚いている。

だが、これはいつもの事である。さて、今日はどこに居ることやら……………。

と、見回すとベッドの下から足が飛び出している。俺はその足をつかんでベッドの下から引きずり出す。功治様登場（寝たまま）である。

「うわ……………」

「お父様……………」

女性陣ドン引き。功治様、娘に嫌われますよ……………」

引きずり出してもまだ気持ちよさそうにお休み中の功治様。あまりの熟睡振りに冥理様がとても冷めた目で見つめてらっしゃる。

「これどうするんですか？」

自分の主人をこれ呼ばわり……………いや仕方ないか。

「見つけたら後は楽です」

そう言っただけ功治様の近くにしゃがみこんで耳打ちをする。ちなみに女性陣に聞かれないように小さな声で。

ピクリ。

功治様の体が波打ち、一瞬にして起き上がる。

「どこだ！体操服の小学生！写真だ、カメラの用意を……………」

「功治様おはようございます」

ばたばたと走り回っていた功治様だったが、俺を見ていつもの調子に戻る。

「何だーいつものか。おっはよう」

これがこの家のいつもの朝の風景である。これでも随分マシなほうだ。前など寝相が悪すぎて、窓枠にへばり付いていた事もあれば、「今日は中学生が良い」だとか「小学校に連れて行って」などと駄々をこねるときもある。

「何これ」

「……………」

二人とも驚きを越して、呆れ返っている。

「あれ？冥理と伊代ちゃんじゃないか。おはよう」

「……………おはようございます。旦那様」

「……………はー」

冥理様はため息。もうお父様と呼ばないかもしれないな。

「って、功治様はその子を知っているのですか？」

功治様は知らないの？という表情でこちらを振り返る。

「この子等は今日新しく入ったメイドだよ」

「この子等？新しいメイド？」

功治様は伊代と呼ばれたメイドに何か指示を出す。伊代は頷いて走って部屋を出て行った。

そこで冥理様が俺の顔をのぞいてくる。そして少しぼつの悪そうな顔で話しかけてきた。

「えっと、朝は少しやりすぎたわ。わ、悪かったわね。で、もう一人っていうのは、朝居たあのメイドのことよ」

「はい？朝何かありましたっけ？」

「あ、あれ？」

朝何かあったろうか？そういえばそこら辺の記憶が抜け落ちているような……………」

「あ、あの連れてきました」

部屋のドアの前に伊代が立っている。功治様に促がされて部屋に入ると、それについて入ってくる女性が一人いた。

その人と目が合う。がしかし彼女はすぐに視線を逸らしてしまった。心なしか顔が赤いようだけれど、どうしたのだろうか。

「はいはいちゅうもーく。この子たちが今日からここで働く、新しいメイドさんの伊代ちゃんと愛ちゃんです」

功治様は一人で拍手をして、場を盛り上げようとする。が、俺は驚いていて声が出せない。冥理様は元から知っていたようで、言葉を聞いても別段驚いた様子はない。

「はい！今日からここでお仕事させていただきます、『しんきい神輝伊代』16歳です！よろしく願いますーせんぱーい」

「あ……ああ、おう」

急に前に出てきて元気に挨拶するものだから、驚いて声がうわずってしまった。

どうやら彼女は天真爛漫な性格のようである。それに比べてもう一人の方は……。

「同じく本日配属された『神輝 愛^{まな}』です。よろしくお願いします。……先輩」

喋り方などから真面目な印象をうける。正反対の性格のようである。

「あれ？お前等は双子か？名前同じじゃないか」

冥理がそんなことを質問する。そういえば二人とも神輝という苗字だったな。

「はい、そうです。しかし双子とは違います」

これには愛さんが返答する。

「愛ちゃんは私のいっこ下だよ」

「てことはまだ中学生？」

横で話を聞く冥理様が少し嬉しそうな顔をする。同い年の子が家に来るといのがやはりよかったのだから。

「え、じゃあ愛ちゃんは……」

ぐるるう。

と、ここで大きくおながが鳴る。いや、決して女性の方々ではないぞ。音はベッドの方向、当たり前だが功治様のものである。

「はあ……分かりました。先にご飯にしましょう」

「「ご馳走様でした」」

朝の食事には俺も参加させてもらった。調理係の伊代さんの腕を認めてもらうためだという。はっきり言ってかなり美味しかった。功治様と冥理様も満足していらしたし、まあ欲を言えばこの家の好みの味を早く知って欲しい。

「どうでした？せくんはい！」

そう言って、伊代さんがぴんぴんと跳ねるように近づいてくる。無邪気である。どちらかというと愛ちゃんがお姉ちゃんな気がする。

「お、美味しかったよ。あと同年だし別にもっとくだけた呼び方でも……」

「あゝそーだったね。て、最初はけいちゃんって呼んでたよね。つい愛ちゃんにつられて」

うーん、やはり愛ちゃんがお姉ちゃんではなからうか。

「じゃあさじゃあさ、けいちゃんも『伊代』って呼んでよ」
「えっ？」

いや、それには流石に抵抗が……。

「姉さん。それくらいにして後片付けを」

「あ、ごめーん。待ってー」

あ……。なんだかこちらばかり疲れている気がする。……俺も片付けを手伝うかな。

そう思い席を立ち上がる。しかし、前に座っている功治様が目で俺を呼んでいた。こちら辺は一年間お供をしていれば大体分かってくる。

「どうしました？」

近くに寄ってひっそり訊ねる。これは聞かれない話なのだろうから、という心遣いである。

「うん、話があるからさ、後で部屋に来てよ」

「……分かりました」

何かあったのか？

ひよっとすると伊代ちゃんと愛ちゃんのこと、何かあるかもしれない。

俺は少し急いで食器を片付けた。本当だったらすべて洗って、食洗機をかけなければいけないが、愛ちゃんがすると言い張ったのでそれは任せた。

その後急いで部屋に向かうと、すでに功治様は来ていた。その隣には何故だか知らないが、冥理様が不機嫌そうに立っている。

「来たね。さ、座って」

功治様の反対側にあるソファに座るように促す。

「……と、冥理もそっち」

冥理様は自然と功治様側のソファに座ろうとしたが、功治様はこちらのソファに座るように言った。冥理様は何故？という顔をしたが、功治様が真面目な顔だったので渋々こちらに移動してきた。しかし、そんな時でも俺と距離をおいて座るのが冥理様らしさだろうか。

「ふふ……………」

そんな俺らを見て、功治様は笑いを隠せないようだ。

「さてと、では本題に入ろうか」

功治様もソファに座る。真面目な話だろうか。

「ねえ、こいつと同じ話なの？」

「ああ、今から話すことは二人とも関係のある話だよ」

二人に？ いったい何の話か見当もつかない。

「じゃあ、単刀直入に話すよ」

……………ううむ。緊張するなあ。

「けい君を今日で解雇します」

……………は？

「え？ それマジだったの？」

冥理様も予想外といった反応をする。

「ああ、違うよ。悪い意味じゃないから話を最後まで聞きなさい」

「は……………はあ」

悪い意味じゃない解雇っていったい何なのだろうか。解雇されて楽しい人は流石にいないのではないかと思うのだが……………。

「けい君は今、朝から夕方まで仕事してもらってるよね。けれど伊代ちゃんと愛ちゃんが入ったから、手が十二分に足りてるんだよね」

「はあ……………」

「だからけい君は解雇」

「……………それはないでしょう」

この人は冗談を言っているのだろうか。本当にそんな理由で辞めさせるのであれば、少しばかり横暴すぎではないだろうか。とい

うか功治様はこんなことを言うはずがない。功治様はもっと………

「ということでけい君は今から、冥理ちゃん専用の召し使い兼お友達兼クラスメートとしまーす！」

……そうそうこういう人だね。本当期待を裏切らないよ……。

「って、ドユコト？」

「……………」

功治様は立ち上がって強く拳を握る。そして政治家のように力説しだす。

「冥理は明後日から学校に通う。だが、アメリカから帰ってきたばかりの冥理ちゃんは日本にはお友達がない。それはあまりにも可哀想とは思わんかね！？……というわけで入学おめでとう二人とも」

「何、話終わらせようとしてんだー！！納得できるかー！！！」

あ、とび膝蹴りが決まった。うーんきれいに決まってるよなー。

何か武術をやっていたのか？

「め、冥理ちゃん……お父さんの優しさが気に入らないのか……わ、わたしは」

「で、専用召し使いとはいったいどういうことですか」

跳ねるように起き上がる。あのとび膝蹴りのダメージはどこへやら、無敵超人かこの人は。

「ほら、冥理ってあんまり身の回りの世話を自分で出来ないでしょう。だから、いっそけい君に冥理の世話は完全に任せてしまおうと思ってる。よろしく頼むよ」

横目で冥理様の様子を窺ってみる。眉間にしわを寄せて、ものすごく不服そうである。

「私嫌よ」

「何故だい？」

「……………っな、何故って……」

功治様が急に真剣な顔になった。一瞬で様子が変わったので、冥理様も驚いてしまい答えに口籠る。

「悪いけれど、これは冥理の意思は関係ない。私の考えだよ」

何も言えない冥理様は唇を噛み悔しそうにしている。

何者にも有無を言わさない、そんな覇気さえ感じ取れる口調だった。

「……………」

そんな父親の威圧的な態度に耐え切れなくなったのか、走って部屋を飛び出して行ってしまった。功治様はそれに目もくれることなく、こちらを見据えている。

「けい君」

「……はい」

「大体察しはついているんでしょ」

その通りかも知れない。功治様のこの言い方は普通じゃないことは分かっている。無理やりにでも俺を冥理様の近くに居させようとしている。

「君の腕を見込んでいつているんだよ」

やはりそうか。この人は俺の事を知っている。ということは、つまり……。

「何故俺に身辺護衛をさせるんですか」

「狙われているようなんだ、あの子が」

「俺はそっちからは手を洗ったのですが」

功治様はにっこりと笑って言う。

「僕は家の召し使いの霧浜啓志に頼んでいるんだよ」

「……断れませんよね」

功治様はソファを立ち上がり、こちらに手を差し伸べてくる。握手。これに応じれば契約は成立する。

俺は「この人には敵わないな……」と思っ、握手に応じた。

（俺もこの一年で変わったってことか）

不思議と表情が和らいでいた。

「艦聖学院ですか？聞いたことありませんね」

冥理様の護衛……もとい、専属召し使いを引き受けた俺は愛さんから詳しいことを説明してもらっていた。……のだが、さっきから聞いたことない言葉ばかりで困っていた。

しかも、俺は学校にもついていかなければならないという事でその学校についての説明も受けていた。そのため説明に時間がかかって、かれこれ2時間ほどになる。

「それは仕方ないと思いますけど……。あ、もう勤務時間は終了です
すね」

「え」

もうそんな時間かと思い時計を見ると、9時半を過ぎたところだった。

「ということで説明はここまでですね。後はぶっつけ本番で」

「そ、そんな困ります」

俺がそう言うのと愛さんは不機嫌そうな顔をして、立ち上がる。

「急に教えて、と来たのは貴方でしょう。困らないでください」

愛さんは踵を返して、部屋から出て行ってしまふ。愛さんも伊代……も、もう少し残るようだ。どうやら俺の時より1〜2時間ほど勤務時間が長いらしい。

功治様からは終了時間になったら、すぐに帰宅するように言われている。明日にひびくと困るから、と言っていたが、それだけでは
ないような気がするの
は気のせいだろうか。

「じゃあお疲れ様でしたー」

いつもの挨拶をして帰ろうとしたとき、功治様がすごい勢いで走
ってきて扉との間に滑り込んだ。手には大きめのバッグを抱えてい
る。

「こ……これ……冥理が忘れて行っちゃって……無いと困るだろう
から渡してあげて……ハア……ハア……」

と、手に持っていたバッグを渡される。

「これは？」

「いいからいいから」

そういつて屋敷の中へ入ってしまった。

これを冥理様に渡せば良いのか？中身が気になるが、主の物を勝手にあさる訳にも行かない。というか、いつ渡せと？俺は今から家に帰るのに、探して渡せということだろうか。しかし、何にしてもどこに居るかくらい言ってくれればいいのに……。

すぐ探しに行こうかと考えたが、そうなると荷物が多いし、どこに行くかも決まってるから、どれだけ時間がかかるか分からない、ということで一度帰宅することにした。

帰りながら「冥理様、早く見つかるといいな」とか考えていた。まあそのときの俺は、まさかあっさり見つかるとは思って無かったんだけど……。

「ん？電気点けっぱなしだったかな」

リビングの方を見れば電気がついていた。どうやら点けたまま出てきてしまったようである。

普段俺はリビングを使うことは無い。使うとしたら、仕事から帰ってきて少し遅めの食事を取るときくらいだ。つまり、これは昨日の夜から点けたままだったということになる。

（電気代……馬鹿にならないよなあ）

そんなことを思いながら、家の鍵を探して鞆をあさる。

ちなみにこの家のドアの鍵は三つある。用心深いのにはいろいろ訳がある。三つすべて掛けるときは遠出するときくらいだけれど、どんなときでも鍵を二つは掛けるようにしている。

「あれ？」

けれど、今日は掛かっていなかった。

……おかしい。俺は朝出てくるとき鍵を掛けた覚えがある。間違いはないはずだ。

周りの空気が変わったような感覚。夜の闇がより深いものとなっていく。

ゆっくりと戻ってくる昔の感覚。

荷物を静かにおろし、軽く身構えてリビングへ向かう。

近づく案の定人の気配がする。しかも、どうやら相手もゆっくりとこちらへ近づいてきてるようだ。

俺はドアの2mほど後ろから様子を伺う。ドアを隔てた反対側には明らかな人間の香り。殺気は感じられないが、久しぶりなので自然と体に力が入る。

ドアノブが動く。いつでも飛び出せる体勢で拳を握った。

(来るか———!?)

相手が開け放った。現れたのは……。

「お、お帰り……なさい。ご主人様!!」

武器を持った泥棒などではなく、メイド服を着た女の子だった。

「って、ありゃ!?!」

しかも女の子は……。

「き、今日からお世話になります。紀丑冥理と言いま………ん?」

俺は、昨日こそ人生で最も最悪な一日だったと思っていたが、どうやら撤回する必要があるようだ。

今日こそ間違いなく本当の人生最悪の日です。

召し使い日記―3日目―

(明日からは題名をつけよう)

「――どういふこと!？」

「いや、むしろこっちが聞きたいですよ!」

家に帰ってきた俺は予想外の状況に、冥理様共々パニック状態になっていた。

屋敷から帰ると、家にお勤め先のお嬢様がメイド姿で出てくるのだ。普通に考えておかしいだろうこれは……。

「ま、まあ落ち着いて。お茶を入れるのでリビングへどうぞ」

「……ん。そ、そうするか」

二人とも混乱しては話にならないので、まずは自分を落ち着けよう。

普段、あまり台所は使わないけれど、いざというときのためにある程度のは用意しているつもりだ。確か紅茶も二、三種類はあったはずだ。

食品棚を見ると、奥のほうに箱詰めされた茶葉のセットがあった。それを慣れた手つきで開け、お茶を沸かす。こういう仕事は召し使いをやっているので、嫌でもできるようになってしまう。

「えっと……あ、居た」

紅茶をもってリビングへ行くと、冥理様はリビングの棚をあさっていた。

「あのー。冥理様？」

「んー？」

俺が声をかけても漁るのに熱中していて、返事も適当だ。

「お茶を入れたんですけどー。飲みながらお話しませんか？」

「うん……ちょっと待って」

返事をした後も少し中を漁っていたが、満足したのか手に何か持ってきてソファに座った。

「ん……おいしい」

お茶に対しては素直になれるんですね……。普段からそうならどれほど楽か。

「柵から何を持ってきたんですか？」

冥理様は手に持ってたものをテーブルの上に置いた。

「優しそうな両親ね」

それは両親と俺が一緒に写っている写真だった。まだ俺が小さい頃のもので、少し色あせている。

「何でこれを？」

「ああ、お前がどんな人間か探ろうと思って家捜ししていたけど、これくらいしか見つからなかった……」

ご苦労なことだ。彼女みたいな上流階級の人間が、俺のような一般人……ではないが、ただの召し使いのことを必要以上に知ってどうするというのが。ブルジョアの考えることはやはりよく分からん。それに、またどうにも面倒くさい物を見つけてきたな。

「お前家族は？」

やっぱりこの話になってしまう。

「……今はどうでもいいでしょう。それよりも今の状況を……」

「よくない」

「え？」

強い物言いだったので、冥理様の顔を窺うと、とても寂しい顔をしていた。そう、部屋の掃除をしに行ったときに見せた、あの表情だ。

「お前の家族は？お前はなぜ高校に行かず、屋敷で働いてる？」

まるで、咎人への尋問のような問いかけに、俺は自分がとんでもない間違いを犯したように感じた。俺は過去、同じ表情をした人間に多く会っている。だが、そんな子に俺の身の上を語ったらもっと悲しませる。

俺は一度その経験があった。

「冥理様」

俺は優しく諭すように問いかける。その口調に冥理様も少し表情

を和らげる。

「人には他人に話せないことが多くあります。内容もそれぞれですが、それが自分に都合が悪いから隠す秘密と、大切な人を傷つけないための隠す秘密があるんです」

「……何が言いたい？」

何かを疑うような視線を向けてくる。屁理屈とも思っているんだろう。

「家族はいますよ。所要で出かけているだけです」

「一年も？」

「人には秘密があるといったはずです」

冥理様はしばらく納得いかない様子で、こちらを睨んできたが、俺が口を割らないと思ったのか、やれやれといった様子で話を変えてくれた。

「で、この状況は何？」

「それはこっちの台詞ですっ！なに強気な態度とってるんですか！」興奮して大きな声を出した。

冥理様が驚いたかをするが、お構いなしで続ける。

「どうやって家に入ったのか、何でメイドの真似をしているのか、何故家に来たのか。きちんと答えてください！」

俺の気迫に冥理様は縮こまる。

「わ、分かったから、一つずつにしてっ——」

暗い裏路地。都内のこの場所はある殺し屋の受付所である。今日もまた人が来て、極秘で殺しの依頼をする。

「^{なた}鉦はいるか？」

今日は長身、初老の男性。影から鉦と呼ばれた『それ』は相手を確認をして、問いかけに答える。

「依頼はルールどおりにしろ」

どこからか聞こえてくる、男か女かも分からない声。男性は噂通りの異質さに恐怖を覚える。

「そ、そうだったな。だが姿は見せてくれんのか？」

「物を置いて失せろ」

男性は苦い表情をして、手に持っていた物を足元に置くと、そそくさとその場を後にした。

鉦は男性が居なくなっただのを確認すると、潜んでいた影から出てきて置いていった物を拾い上げる。

一つは封筒。これには料金が入っている。もう一つは依頼内容について詳しく書かれた紙。彼に依頼をするときはこうするようにと指定している。

依頼の内容とその報酬が見合わないようであれば、その依頼は受けない。

今回の依頼……。

「紀丑？聞かない名だ……」

封筒を開けて中身を確認すると、中には1000万の小切手が入っていた。1000万は比較的多いほうである。普通、1000万だったら企業の重役や有名人の依頼である。

彼は裏には精通していて、彼自身もかなり名は知れているのだが、どうも紀丑という名には聞き覚えがなかった。

わずかに不信感が残ったが、値段的には文句がなかったので依頼の詳細と小切手を持って路地の闇の中へと消えていった。

「社会学習？」

俺は今、自分の家のリビングで冥理様に事情聴取を行っていた。内容はもちろん、何故勝手に家に上がりこんでいたのか、である。それなのに、その理由にしてはそぐわない答えがかえってきた。

「そう。お父様に長く日本を離れていたからということで、現代の日本を学ぶために社会学習をなさいつて言われて」

「で、なんでこうなるんですか……」

話が全く繋がっていない気がするのだが……。そもそも、社会学習なんかしなくても学校に通うわけだろう。これは間違いなく何か裏

がある。

「社会学習としてまず、新しい政策である召し使いを学べと。それならいっそ召し使いになれと」

「ほうほう」

それには確かに一理あると思う。

「それで、知らない人の所にやると心配だから、信頼できる人のを用意するということになった」

「ふむふむ」

やっぱり金持ちの子供だからな、それもちろんあると思う。

「それでここに来た」

そうかそうか、それで俺の家に……。

「ってなんでだよっ!!」

急に話がぶっ飛んだ!?

「そんなの知らない」

「いやいや……」

そんな私は関係ないみたい……。ちょっと身勝手すぎないか。

「私はここは信頼できるからと、連れてこられただけ」

————ブブブブ

急にどこからか携帯電話か何かのバイブレード音のような音が聞こえる。

それはどうやら俺が帰り際に渡されたバックの中からしているようだ。

「何の音?」

「ああ、このバック。冥理様にと功治様から渡されたものです」

「じゃあ私が開ける」

冥理様は立ち上がると、部屋の入り口の近くに置きっぱなしになっていたバックを取って来て漁り始める。

すると中から黒い携帯電話を取り出した。どうやらこれが鳴っていたようだ。

「これ、何?」

「俺に聞かれても」

冥理様は少し分からない顔をして、携帯電話を開いた。
その瞬間。

——ブブブブ

「うにゃあ!？」

途端に携帯電話が鳴り出す。

それにしても驚いた声が随分と可愛かったな。

「冥理様、電話が鳴っただけですよ」

冥理様の驚き方に笑いをこらえるが、どうしても笑いは漏れてしまう。

そんな俺の様子を見て、我に返った冥理様は怒った顔をして、
「いい今のは驚いたフリよ。フリだから。いいからそういうことに
してて」

やっぱり恥ずかしいのか、めいっぱいの虚勢を張る。

「わかりました、わかりました。とにかく電話出てみてください」
冥理様は思いつき俺を怪しむような目で見ながら、おそろるおそ
る通話ボタンを押した。

「もしもし……」

「はい冥理ちゃんかい☆」

ピッ

冥理様はためらいもなく通話終了した。

ハアハアとなぜか息切れしている。

「一体誰だったんですか？」

「……たいだった」

「え？」

——ブブブブ

また電話がかかってきた。

「次は俺が出ます」

冥理様を取り落とした携帯電話を拾い上げ、電話に出る。
「もしもし」

「おや、次はけいくんだー☆」

ピッ

「変態でした」

「だろ」

「――ブブブブ」

「何なんですか！もう」

電話に向かって怒鳴る。俺たちにこんな喋り方をする相手はただ一人、もちろん功治様である。

「そう怒らないで、話を聞きなさい。今、君たちは説明を求めているだろう」

説明というのは、おそらく冥理様のことだろう。ということは…

「すべて功治様の計画通り、ってことですか」

「そうだよ」

俺は電話を持ったままソファに崩れるように座り込む。正面にはどうなっているのか聞きたげな冥理様がいる。

面倒だが、また俺たちは功治様に遊ばれているようだ。本当にはた迷惑な雇い主である。少しは、毎日苦勞している召し使いの身になって欲しいものだ。

「で、これはどういうことですか？」

本当に面倒だがとりあえずは説明が欲しい。

「冥理から話は聞いてないかい」

「冥理様……？」

正面の冥理様をもう一度見る。どうにも話の内容がわからないように、顔をしかめている。俺が見ているのに気付くと、話の内容を教えるように目で催促してくる。

「って、もしかして社会学習ってやつのことですか？」

「その通り。そして、その勤め先として君の家はちょうど良い」

それはないだろう。仮にもお金持ちの娘だぞ。俺には巧い言い訳としか聞こえない。

それにしても自分の子供、ましてや娘を下働き（男）に任せるって、一体この人はどんな神経をしているんだろうか。しかも功治様は俺たちとは格の違うブルジョアで、冥理様はそのご令嬢なのに……。

（本当にはた迷惑だなあ。）

けれどそこで気付く。自分が今、冥理様のことを少なからず心配してしまっていたことに。そして、心配できるのは俺だけということに。

アメリカ帰りで知り合いも少ないとなると、冥理様が心を許せる方は功治様くらい。心を許しているかどうかは別にして、こういうお願いを出来る知り合いといったら自分くらいしか居ないのではなからうか。自分で言うのもなんだが、俺に冥理様をどうこうしようという気はない。功治様が言った『ちようどいい』とはこういう意味なのかもしれない。

そしてそれと同時に今日、功治様に冥理様を頼まれたことを思い出した。やはり学外でも冥理様を護衛しろということだろう。そのために一緒の家で寝泊りさせる……。

「……ここまでして守るのですか？」

「察してくれたようで嬉しいよ。」

やはり功治様本人も冥理様を思っていることのようにだ。そういうことならば多少のことは、我慢しなければいけない気分になる。

「近いうちに詳しい話を聞かせて下さい」

功治様が何故ここまで警戒するのか。まだ幾つか不審な点があったので、電話を切る前にそれだけ付け足した。

電話を終えたのを見計らって、冥理様が詰め寄ってきた。長電話したせいか若干ご機嫌ナナメである。

「お父様となに長電話してるのよ」

「ん、あー……い、いやあ」

今の話をそのままするわけにもいかず、どうしようかと思っていると、妙に口ごもってしまった。

「んー？何か歯切れが悪い。何話してたの？」

何か言い訳を考える。しかし、これからのことを考えると、どうすればいいかわからなくなる。

俺のような黒い過去を持った人間に、こんな状況が起こるなど誰が考えたろうか。今までの人生、なに不自由なく生きてきた冥理様ののような人間と、その正反対の位置にいた俺。

しかし、俺はこういう人間と交わることは少なくなかった。ただいつもとは交わり方が違う。

考えれば考えるほど、どうすれば良いかわからない。

いや、誤魔化せばいいのだ。

何とでも言える。社会学習で押し切るのも良いだろう。

しかし、社会学習という理由を使うと……。

「冥理様が俺のメ……」

と、俺が一瞬恐ろしいことを口走ろうとした瞬間、再度携帯電話が振るえた。

冥理様が何かとそれを見て、俺に出るように促した。

通話ボタンを押した途端に功治様の声が飛び出してきた。

「わーすれてた！きちんと任命してあげなきゃね！スピーカーボタンを押して冥理にも聞こえるようにしてあげて」

俺は言われた通りに、携帯電話に（なぜか）付いてあったスピーカーの絵が描かれたボタンを押した。

これで音が大きくなって、冥理様にも聞こえているようだ。

「よーしいいね。でわっ！」

まるで軍人のような口調で叫ぶと、大きく咳払いを幾度かして大きく息を吸った。（音がした）

「霧浜啓志。お前を正式に冥理の専属召し使いとする。就勤時間は今まで通りだ。そして、紀丑冥理！」

名前を呼ばれた瞬間、冥理様は驚き椅子の上で軽く飛び跳ねる。まさか自分が呼ばれるとは思ってなかったのだろう、急なことにとっても動揺している。

「けい君の勤務時間外のみ、社会学習の一環として、お前をけい君専属のメイドとするう!!」

と、大声で叫んだ余韻を残しつつ、電話は荒々しく切られた。俺と冥理様はお互いの顔を見合わせた。

「な、何~~~~~!!!!!!」

冥理様が叫ぶ。これが当たり前の反応だろう。

だが俺はもう、なんと言うか呆れて何も言えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1616q/>

召し使いの召し使いはお嬢様

2011年5月31日18時55分発行